



令和8年度 果樹情報 第8号

(令和8年7月3日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (6月後半、果樹研究所)

平均気温は、第4半旬が21.7℃で平年より0.4℃高く、第5半旬が18.6℃で平年より3.1℃低く、第6半旬が23.3℃で平年より0.9℃高く経過しました。

この期間の降水量は106.5mmで平年比145%と平年並でした。日照時間は115.8時間で平年比130%と平年より多くなりました。

2 土壌水分 (6月30日現在、果樹研究所)

6月30日時点の土壌水分 (pF値: 果樹研究所なしほ場: 草生・無かん水) は、深さ20cmで2.2、深さ40cmで1.9、深さ60cmで1.8となっており、概ね適湿状態です (図1)。

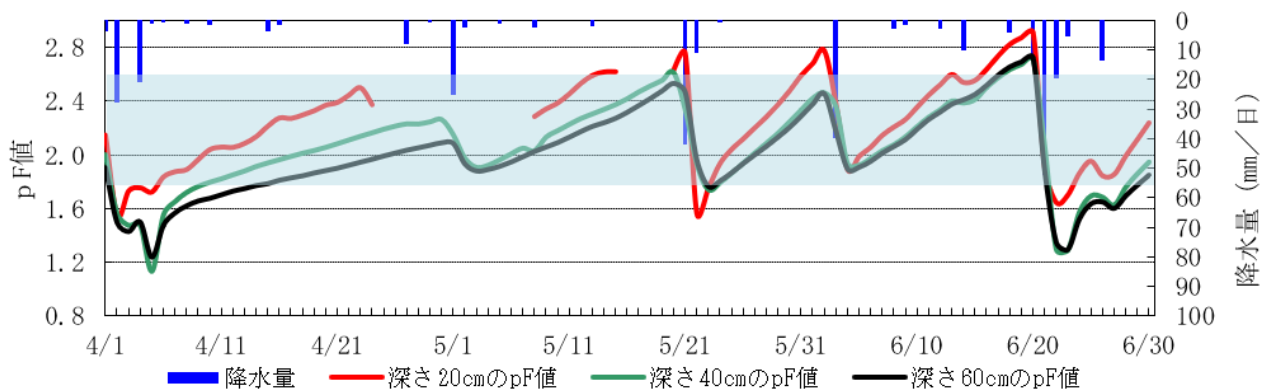


図1 土壌 pF 値の推移(果樹研究所なしほ場:草生・無かん水)
図中の網掛け部は、適湿の範囲 (pF1.8-2.6)

3 発育状況 (7月1日現在、果樹研究所)

(1) もも

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が57.4mm (平年比114%)、側径が60.1mm (平年比121%)、「ゆうぞら」は縦径が52.1mm (平年比108%)、側径が48.4mm (平年比112%)と両品種とも平年より大きい状況です。

満開後日数で比較すると、両品種とも平年よりやや大きくなっています。

イ 新梢生長

満開後80日における「あかつき」の新梢長は14.1cm (平年比104%)と平年並で、展葉数は16.7枚 (平年比108%)と平年よりやや多く、葉色は平年並となっています (表1)。「ゆうぞら」は、新梢長は19.1cm (平年比126%)と平年よりかなり長く、展葉数は18.7枚 (平年比124%)と平年よりかなり多く、葉色は平年並となっています。新梢停止率は、「あかつき」「ゆうぞら」とも平年比108%と平年よりやや高くなっています。

ウ 核障害の発生

満開後75日における「あかつき」の核障害発生は、核頂部亀裂10.0%で平年より少なく、縫合面割裂が40.0%と平年より多い状況です (表2)。

エ 収穫状況

「はつひめ」の収穫始は6月26日で平年より9日早く、昨年より4日早くなりました (表3)。

オ 収穫期予測

果樹研究所における、発育速度 (DVR) モデルによる「あかつき」の発育予測について、気象庁の気象予報を用いた場合は、本年の収穫開始日は7月23日で平年より6日早く、収穫盛期日

は7月26日で平年より6日早い見込みです(表4)。

なお、ももの収穫期は直前の天候の影響を受けやすいので、今後の気象予報に留意してください。

表1 ももの新梢伸長(満開後80日)

品種	新梢長(cm)			展葉数			葉色(SPAD)			新梢停止率(%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
あかつき	14.1	13.5	104	16.7	15.5	108	42.8	43.4	99	92.5	85.5	108
ゆうぞら	19.1	15.2	126	18.7	15.1	124	43.1	43.9	98	87.5	81.1	108

注) 平年は、1996～2025年の平均値

表2 ももの核障害発生状況(品種:あかつき)

年	満開後日数	30日	45日	50日	55日	60日	65日	70日	75日	85日	95日	収穫果
2026	核頂部亀裂	12.5	20.0	5.0	50.0	35.0	25.0	25.0	10.0	-	-	-
	縫合面割裂	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0	15.0	25.0	40.0	-	-	-
2000 ～2025	核頂部亀裂	32.9	37.7	42.5	48.3	51.2	47.3	44.3	40.0	45.4	47.0	45.0
	縫合面割裂	0.1	0.0	1.3	2.9	11.0	21.9	26.6	24.4	33.5	36.6	25.5

注) 平年は、2000～2025年の平均値

表3 ももの収穫状況

品種	収穫開始日			収穫盛期			収穫終期			果実重(g)			糖度(° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
はつひめ	6/26	7/5	6/30	未	7/8	7/4	未	7/11	7/7	未	273	316	未	11.8	13.0
日川白鳳	未	7/10	7/3	未	7/13	7/6	未	7/17	7/10	未	237	251	未	11.3	13.3
暁星	未	7/19	7/15	未	7/23	7/18	未	7/27	7/24	未	222	198	未	13.0	14.2
ふくあかり	未	7/20	7/18	未	7/25	7/24	未	7/29	7/28	未	274	302	未	13.0	15.8
あかつき	未	7/29	7/25	未	8/1	7/29	未	8/7	8/4	未	284	341	未	13.1	14.3

注) 平年値は、1996～2025年(「はつひめ」「ふくあかり」は2010年～2025年)の平均

表4 もも「あかつき」の発育予測日(果樹研究所:7月1日現在)

	観測日		今後の気温経過			
	昨年	平年	気象予報	平年並	2℃高い	2℃低い
収穫開始日	7月25日	7月29日	7月23日	7月23日	7月22日	7月23日
収穫盛期日	7月29日	8月1日	7月26日	7月26日	7月26日	7月27日

注1) 平年は1996～2025年の平均値

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3～4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値

注3) 発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する

(2) なし

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が36.7mm(平年比105%)、横径が45.8mm(平年比110%)、「豊水」は縦径が38.8mm(平年比106%)、横径が43.1mm(平年比108%)と平年より大きい状況です。

満開後日数で比較すると、両品種とも平年並です。

イ 新梢生長

満開後70日における「幸水」の予備枝新梢長は100.9cm(平年比92%)で平年よりやや短く、

不定芽新梢長は 96.7 cm（平年比 101%）で平年並でした。予備枝新梢の葉枚数は 29.0 枚（平年比 99%）で平年並でした（表 5）。予備枝新梢停止率は 35.5%、不定芽新梢伸長停止率は 58.1%となっています。

満開後 80 日における「豊水」の予備枝新梢長は 97.1 cm（平年比 90%）で平年より短く、不定芽新梢長は 79.5 cm（平年比 91%）で平年よりやや短くなっています。予備枝新梢の葉枚数は 30.1 枚（平年比 104%）と平年並となっています。予備枝新梢停止率は 95.7%、不定芽新梢伸長停止率は 97.8%となっています。

ウ 生育予測

7 月 1 日現在の DVR モデルによる「幸水」の収穫盛期の予測は 8 月 21 日ごろで平年より 6 日早い見込みです。

表 5 なしの新梢生長（「幸水」は満開後 70 日、「豊水」は満開後 80 日

品種	予備枝新梢長 (cm)			不定芽新梢長 (cm)			予備枝葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	100.9	109.7	92	96.7	96.1	101	29.0	29.3	99
豊水	97.1	108.2	90	79.5	87.8	91	30.1	29.0	104

品種	予備枝新梢停止率 (%)			不定芽新梢伸長停止率 (%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	35.5	54.7	65	58.1	71.3	81
豊水	95.7	87.3	110	97.8	91.3	107

注) 平年値：新梢長は 1996～2025 年、葉枚数は 1998～2025 年の平均値

(3) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が 57.3 mm（平年比 110%）、横径が 62.4 mm（平年比 107%）、「ふじ」は縦径が 49.6 mm（平年比 107%）、横径が 52.9 mm（平年比 107%）と両品種とも平年より大きい状況です。

満開後日数で比較すると、両品種とも平年並です。

(4) ぶどう

ア 新梢生長

発芽後 70 日における「巨峰」の新梢長は 194.4 cm（平年比 141%）と平年より長く、展葉数は 22.0 枚（平年比 119%）と平年並より多い状況です（表 6）。

表 6 ぶどう「巨峰」の新梢生長

発芽後 日数	新梢長 (cm)			展葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
40	78.7	60.8	130	10.2	9.3	110
50	115.2	85.4	135	14.2	12.2	117
60	151.9	114.2	133	17.8	15.4	116
70	194.4	138.1	141	22.0	18.5	119

注) 平年値は 2006～2024 年の平均

4 栽培上の留意点

本年の梅雨入りは 6 月 20 日ごろ（平年より 8 日遅い）とみられます。

近年は、無降雨日の期間がしばらく続いた後にまとまった降雨に遭遇し、乾燥や急激な吸湿の影響とみられる生理障害（養分欠乏症や裂果等）が見られることがあるため、気象情報に留意して適度なかん水を実施しましょう。

(1) 共通

ア かん水

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度のため、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

イ 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう(地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされます)。

また、刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(2) 降ひょう害対策

降ひょう被害が発生した地域では、令和8年6月3日付発行の農業技術情報第5号「ひょう害が発生した農作物の技術対策」(URL: www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/744791.pdf)を参考に対策を実施して下さい。

(3) もも

ア 早生品種の収穫

現在、早生品種の収穫が始まっています。**核や胚に障害を持つ果実は、成熟が早まりやすい傾向にあるため、果肉の軟化に注意し、収穫が遅れないように留意しましょう。**

イ 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害を持つ果実などが徐々に目立ってきています。収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施しましょう。果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測では、収穫開始日が平年より6日早い見込みです。収穫期は地域によって差があることから、果樹研究所との平年の生育差を考慮するとともに、園地ごとの成熟状況を確認して収穫期を判断してください。

また、核障害の発生が多い場合には、核や胚に障害を持つ果実が早熟する傾向にあることに注意しましょう。

「あかつき」等中生種は、今月上～中旬ごろから着色期に入るため、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シート設置などの管理作業は、時期が遅れないよう計画的に実施しましょう。

また、降雨により園内に停滞水が見られる場合には、明きょを掘るなど速やかな排水に心がけましょう。

(3) なし

ア 新梢管理

「幸水」では、腋花芽着生向上を目的として新梢誘引を実施する場合、新梢生長が停止する前に予備枝誘引作業を完了する必要があります。そのため、まだ誘引を終了していない場合は急いで作業を進めましょう。

また、新梢誘引は樹冠内の光条件を改善するとともに、薬剤防除の散布むらを減らし、翌春における長果枝棚付け作業の効率化なども期待できるため、「幸水」以外の品種でも積極的に実施しましょう。

イ 着果管理

仕上げ摘果はできるだけ速やかに終了させましょう。着果過多にならないよう、摘果は単位面積当たりの着果量を確認しながら作業を進めましょう。なお、裂果が観察される時期の摘果は他の果実の裂果発生を助長するおそれがあるので控え、裂果が収束(満開後90日ごろ)したら修正摘果を行いましょう。

(4) りんご

ア 修正摘果

果実肥大や果形、傷害の有無等の区別が付きやすい時期なので、小玉果、変形果、病害虫被害

果、サビ果を中心に修正摘果を実施し、適正着果に努めましょう。特に、霜害を受けて摘果を遅らせていた園地では、仕上げ摘果実施後でも新梢の伸びや葉数に注意し、適正着果となるよう修正摘果を行いましょ
う。果台の長い果実は青実果となりやすいことから、結実良好な園では摘果しましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実肥大に伴い枝が下垂するので、樹冠内部の日当たり改善と枝折れ、傷果防止のため、支柱立てや枝吊りを実施しましょう。なお、高温条件下では、果実に直射日光が当たると日焼け果が発生しやすくなるため、果実が果そう葉で隠れるようにするなど着果位置に留意しましょう。

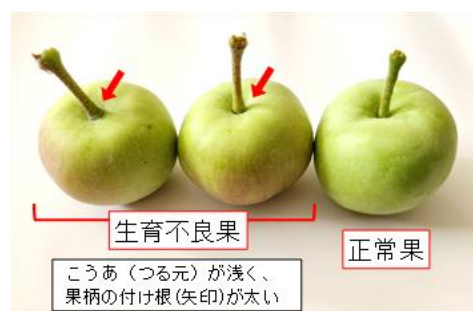


図2 りんごの生育不良果

(5) ぶどう

ア 着房管理

ぶどうの着色始めは、果房中のいくつかの果粒が飛び玉状に濃く着色するのが望ましい状態です。全体的にぼんやりと色がまわってくる場合は、着果過多が影響しているため、早急に着房数の見直しを行いましょ
う。また、着色期の日照不足も着色不良を招くため、込み合っている部分の新梢の整理を併せて行いましょ

イ 新梢管理

新梢が遅伸びすると、光合成により生産された養分は新梢の伸長に消費され、果実への転流が少なくなります。果実品質の低下や新梢の登熟不良を防ぐため、遅伸びしている新梢の摘心や余分な新梢の整理と誘引の見直し、副梢の整理と摘心等を実施し、棚面の明るさを確保しましょ
う。

具体的には、満開 30 日後より前及びベレーゾン期後に、伸長が停止していない新梢を摘心しましょ
う。

摘心は、新梢先端の生長点を軽く摘む程度に行うと副梢の発生が少ない傾向にあります。伸長が停止しない副梢は 2～3 葉残して摘心しましょ
う。伸長が停止しそうな弱い副梢は、棚面が混み合わなければ、そのまま放置してもかまいません。摘心後も棚下が暗い場合は、徒長的な新梢を中心に間引きを行いますが、本数は必要最小限にとどめるように注意しましょ
う。

5 病虫害防除上の留意点

現在、県内では定期的に降雨があります。感染が増加するおそれがありますので、気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょ
う。また、耕種的防除(病斑の除去や新梢管理)を徹底し、発生密度の低減を図りましょ

(1) 病害

ア リンゴ褐斑病

病害虫防除所による6月中下旬の発生調査では、本病の発生ほ場割合は、平年並でした（令和8年6月30日付け病害虫防除情報）。梅雨期は本病の二次感染期となるため、今後発生が急拡大するおそれがあります。

本病の発生（図3）が既に認められる場合は、10日間隔での薬剤防除を徹底し、感染拡大を防止しましょう。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。

イ リンゴ輪紋病、炭疽病

輪紋病または炭疽病の発生が多い園地では、両病害に効果がある薬剤を十分量散布しましょう。なお、炭疽病の発生を抑制するため、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去しましょう。

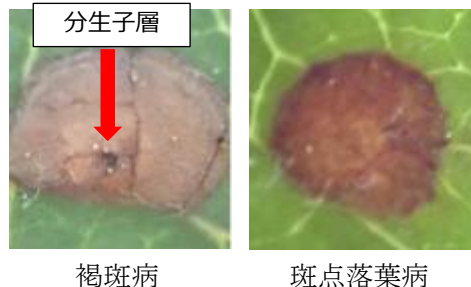


図3 リンゴ褐斑病の初期症状（上）
褐斑病と斑点落葉病の病斑比較（下）
（写真提供：病害虫防除所）

ウ モモせん孔細菌病

梅雨期に入り降水量が多くなると、二次感染により発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要です。病原細菌は降雨で拡散するため、防除対策はできるだけ降雨前に実施しましょう。

晩生種で本病の発生が多い場合は、マイコシールドを2,000倍で使用しましょう。なお、本剤は使用時期が収穫21日前までのため収穫前日数に注意するとともに、成分回数（オキシテトラサイクリン、散布、5回）を確認の上で使用しましょう。

新梢葉が茂り、春型枝病斑を見つけにくい状況ですが、春型枝病斑の発生は7月ごろまで長期間にわたるため、見落としがないよう丁寧に樹冠内部まで確認してください。発病部位の取り残しは被害拡大につながるため、発病した枝、葉、果実などは見つけしだい取り除き、密度低減に努めましょう。特に、樹冠上部での発生を見逃さないように注意し、直下への被害拡大を防止しましょう。

エ モモホモプシス腐敗病、灰星病

梅雨期は灰星病及びホモプシス腐敗病の重要防除時期であるため、花腐れや葉腐れが見られた園地では、7月上旬及び月中旬ごろに両病害に対して防除効果の高い薬剤を十分量散布しましょう。薬剤防除は、収穫前日数に十分注意してください。

オ ナシ黒星病、輪紋病

病害虫防除所による6月中下旬の発生調査では、ナシ黒星病の発生ほ場割合は新梢葉、果実ともに平年よりやや高い状況です（令和8年6月30日付け病害虫発生予察情報発生予報第4号）。「幸水」では満開後50～90日ごろに本病に対する果実の感受性が高まり、重要防除時期にあたるので、防除を徹底しましょう。

防除対策は、果そう基部や葉・果実等の罹病部位を徹底して除去しましょう。本病や輪紋病の多発が予想される場合は、7月上旬及び中旬ごろに両病害に効果がある殺菌剤を十分量散布しましょう。なお、薬剤散布は間隔が空きすぎないよう気象情報に留意し、降雨前の予防散布を心がけましょう。また、散布むらがないように十分な量を使用しましょう。薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

オ ブドウ晩腐病

7月上旬の袋かけ前にはストロビードライフロアブル2,000倍を散布し、摘粒終了後に速やかに

袋かけを行い、本病の感染を防止しましょう。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

第3世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、7月3半旬ごろと予測され、第4世代幼虫の防除適期は7月4半旬ごろと推定されます(表7)。

本種の発生は、放任園や無防除のハナモモ等が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣にある園地では、今後も発生に注意しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

第2世代成虫の誘殺盛期は、今後気温が2℃高く推移した場合、7月3半旬ごろと予測され、第3世代幼虫の防除適期は、7月5半旬ごろと推定されます(表7)。

本種は、もも等の核果類の新梢伸長が停止すると、なし果実への寄生が増加します。例年、なしの果実被害が多い地域では、近隣のもも等における防除も徹底しましょう。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守しましょう。

ウ モモノゴマダラノメイガ

被害が発生しているもも園では、他のシンクイムシ類との同時防除も含め、10日間隔で2～3回防除を行います。被害果実は見つけしだい摘除し、5日間以上水漬けにするか、土中深く埋めてください。

エ ナシマルカイガラムシ

ナシマルカイガラムシ第2世代のふ化盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、8月1半旬ごろと予測されます(表7)。

カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除しましょう。

オ ハダニ類

高温期は増殖が速いので、ハダニ類の発生状況をよく確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)の密度になったら速やかに防除を行きましょう。

カ カメムシ類

本年は、病害虫防除所のフェロモントラップ調査におけるカメムシ類の越冬世代の誘殺数は、一部地域で平年より多い傾向にあります(6月25日付け令和8年度病害虫防除情報:<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/752372.pdf>)。

山間及び山沿いの園地では、飛来状況をよく観察し、多数の飛来がみられる場合には速やかに防除を行きましょう。

表7 果樹研究所における防除時期の推定(令和8年6月30日現在)

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第3世代 誘殺盛期	第4世代 防除適期	第2世代 誘殺盛期	第3世代 防除適期	第2世代 ふ化開始	第2世代 ふ化盛期
2℃高い	7月14日	7月17日	7月15日	7月21日	7月23日	8月1日
平年並	7月16日	7月20日	7月17日	7月24日	7月27日	8月5日
2℃低い	7月18日	7月23日	7月20日	7月28日	7月31日	8月10日

起算日:モモハモグリガ 第2世代誘殺盛期 6月24日(予測値)

起算日:ナシヒメシンクイ第1世代誘殺盛期 6月14日(予測値)

ナシマルカイガラムシ3月1日(演算方法は三角法)

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

福島県農薬危害防止運動を実施中

■農薬使用基準の遵守 ■農薬飛散防止対策の徹底 ■住宅地等における農薬適正使用の推進

実施期間：6月10日から9月10日まで。農薬による事故等の未然防止に努めましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>